

# 「職業観」育成の壁

## —「職業観」育成から見たキャリア教育の現状—

金井研究室 川村 菜苗

### 1. 先行研究の整理と本研究の課題

#### 1.1 若年の労働問題とキャリア教育

若年失業や安易な離職・転職の問題は、フリーターやニートの問題も含めてさまざまな原因が語られている。

このような社会背景をうけて文部科学省は、「キャリア教育」の政策を本格化させている。「キャリア教育」とは、職業に関する知識・考えを身につけさせ、個人の特性を理解した上で進路を選択する力を育成するための教育活動を指す言葉である。

#### 1.2 本研究の課題

キャリア教育の目的の1つとして「職業観」という価値観の育成を目指しているが、本来価値観は個々の生活環境に大きく影響されるものであるため、教育活動の中での育成は困難と考えられる。

そこで本研究は、キャリア教育という政策が学校現場に浸透して、成果が出ているのか、ということ「職業観」が子どもたちに育成されているかどうか、という視点で分析し、キャリア教育の現状と問題点を明らかにしていく。

### 2. モデル・方法の説明

本研究は質的研究という位置づけである。

分析では、それぞれの学校段階に合わせて以下のように定義した「職業観」を使用する。

- ・ **中学校** 興味・関心に基づく自己理解
- ・ **高校** 選択する力

分析の1つめは、職場体験が中学校のキャリア教育の一環として活発に行われていることから、体験後の中学生の感想文から「職業

観」が身についているか見ていく。

2 つめは高校の教師たちがキャリア教育に対して意見を述べたものから生徒の「職業観」の現状や育成の問題点を探る。

3 つめとして、上記2つとは性質が異なるが、独自にキャリア教育を進めていた高校の卒業生の声から、キャリア教育のあり方について考察していく。

### 3. 分析結果

現段階では、キャリア教育を通して中学校・高校それぞれの段階に即した「職業観」の育成はなされていない。

しかし、キャリア教育卒業生の声からは「職業観」として「選択する力」が身につけていることが分かった。

### 4. 考察

分析から明らかになった問題点は、育成すべき各学校段階で育成すべき「職業観」以前の生徒の「職業観」の未熟さや達成度の違い、教師自身の「職業観」や「キャリア教育」に対する考え方の違い、また学校や地域の体制の問題が挙げられた。

問題点や現状を踏まえ、義務教育段階では一定のカリキュラムでキャリア教育を行うことが望ましいと考えられる。これは「職業観」の未熟さや違いを補い、中学卒業時には「職業観」のもとでの進路選択の機会が与えられる。

さらに高校では、各学校の特色を活かしたカリキュラムで行うことで、教師同士が「職業観」を考え、学校全体で取り組む体制ができると考えられる。